

2022 年度（第 36 回）
日本鳥類標識協会全国大会
オンライン大会

2022 年 12 月 10 日（土）

会場：オンライン

主催：日本鳥類標識協会

2022 年度（第 36 回）日本鳥類標識協会全国大会

日程表

12月10日（土）

9:30～ ZOOM会議室 開場

10:00～ 開会挨拶：日本鳥類標識協会会長 尾崎清明

実行委員挨拶：仲村昇

10:10～ シンポジウム

「識別ガイドをめざしての最新のチャレンジに参加しよう！」

趣旨説明 … 須川 恒（京都府）

・ 識別ガイドの必要性とその共有方法 … 深井宣男（群馬県）

・ 識別ガイドの IT 化について … 細谷 淳（宮城県）

・ 日本産ムシクイ類検索表の作成への道のり … 川路則友（北海道）

・ サンコウチョウチャンネル 90 日トライアルから垣間見た識別ガイド
の課題 … 熊代直生（大阪府）

総合討論 司会進行：須川 恒・尾崎清明

12:00～13:00 休憩（ブレイクアウトルームでご歓談ください）

13:00～ 一般講演（1演題15分）

1. 逆転の発想が必要だったのかーシマセンニュウの年齢階級判別ー
（高木昌興・白岩颯・古巻翔平）
2. カワセミの換羽（内田博）
3. 利根川下流域でフラッグを装着したシギ・チドリ類の移動記録
（小田谷嘉弥・望月通人・小西広視・阿子島大輔）

13:50～14:00 休憩（10分）

4. 大阪自然史フェスティバル2022におけるブース展示（須川恒）
5. ヤンバルクイナの捕獲方法(2)（尾崎清明・米田重玄・渡久地豊）
6. 空中写真と地形図を利用した網場候補地選定（仲村昇）
7. 短い紐の鳥袋の利用報告（細谷淳）

15:10～15:50 休憩（ブレイクアウトルームでご歓談ください）

15:50～16:20 網場紹介等（5件）

16:20～18:00 休憩（ブレイクアウトルームでご歓談ください）

18:00～20:00 懇親会

20:00 閉会挨拶 日本鳥類標識協会副会長 梶田 学

＊本年度の総会は書面およびオンライン開催となりますので、大会中には行われません。

識別ガイドをめざしての最新のチャレンジに参加しよう！

企画・進行 須川恒@京都市

識別ガイドが必要だとのバンダーの声は多いですがその歩みはゆっくりです。識別ガイド作成に向けてのシンポジウムは2回目です。2014年にスウェーデンのスベンソンさんの講演があった際にシンポジウムがありました。

https://birdbanding-assn.jp/J04_convention/2014/2014taikai.htm

その後数年の活動は協会誌投稿を待つ戦略だけだったのか挫折して、その後、ここ数年、協会も協力して識別ガイドに特化したMLを作成し新しいツールを利用した動きがありました。

中心的なメンバーは、先駆的に識別ガイドの重要性を指摘して作業していた深井宣男さんなので、昨年の一般講演発表の内容に最近の進展も加えた基調講演を収録録画で紹介します。識別ガイドの必要性和最近の動きをご理解ください。

講演1 深井宣男 「識別ガイドの必要性和その共有方法」→講演要旨

次に最近のチャレンジで重要なIT技術についての解説をしかけ人の細谷淳さんに解説してもらいます。識別ガイドに特化した協会メーリングリスト、識別ガイドのSLACK、さらに成果発信のWikiというしかけについて説明してもらいます。

講演2 細谷淳 「識別ガイドのIT化について」→講演要旨

ひきつづいて、最近の動きの中でもりあがったムシクイ類のインハンドによる識別についての話を紹介いただきます。

講演3 川路則友 「日本産ムシクイ類検索表の作成への道のり」→講演要旨

川路さんらのムシクイチャンネル(SLACKの会議室)でも活躍していた大阪の熊代直生さんから和歌山県日高こだわった調査の流れでムシクイ類をはじめとするインハンドの識別の世界に入った過程を最新のこだわりのサンコウチョウのテーマで見えてくる課題について語っていただきます。

講演4 熊代直生 「サンコウチョウチャンネル 90日トライアルから垣間見た識別ガイドの課題」

→講演要旨

やりとり 進行 須川恒+尾崎清明

やりとりをして、まずWikiで種の識別ガイドづくりを経験した数名に、その経験を語ってもらいます。簡単にご紹介ください(氏名、出身地、作成した種名、作成して思ったこと(なんでも))。

つぎに、全体を見ていた尾崎清明さんに全体をとおしてのコメントをいただき、その後質疑の場を設けたいと思います。

このシンポジウムのタイトルを「識別ガイドをめざしての最新のチャレンジに参加しよう！」としました。まださまざまな課題は含まれていますが、ここ数年の識別ガイドにむけてのたしかな歩みをご理解いただけたのではないのでしょうか。このシンポジウムが幅広く多くの人が参加いただく識別ガイド作成へのきっかけとなることを願っています。

識別ガイドの必要性和その共有方法

深井宣男（群馬県）



id-guide 参加



Wiki 閲覧方法

なぜ識別ガイドが必要か

バンダーであれば誰も「1羽でも多く、1種でも多く捕獲したい」という想いがあると思います。それは私欲ではなく、調査地の保全に役立てるために潜行性の種や野外識別困難な種の確実な記録を残すことや、ある種の保護に役立てるために生態に関する情報を1つでも多く残すことにつながるからです。そのために欠かせないのが、捕獲の技術と確実に識別するための知識です。これらは世代間でどのように伝わってきたのでしょうか。少し大げさに書くと、昔は徒弟制度的なシステムで、師匠から弟子へ伝えられる場合が多かったと思います。一長一短だと思いますが、繋がりには深かったのではないのでしょうか。近年は、効率よくバンダーを養成するために、各地の指導者の元で、いわば資格制度的に調査技術を習得できるようになっています。新たにバンダーになる方々にとってはいい制度だと思いますが、一方で、指導者以外のベテランバンダーと若手バンダーの間で、技能や知識の交流が十分ではない場面が出てきているかもしれません。

標識調査に求められるものも変化してきました。昔は鳥の移動を知ることが主要課題でしたから Rc が一番重要なデータでした。近年、発信機や記録計の飛躍的な進歩によって鳥の渡りを直接的に知ることができるようになり、Rc の重要性は少し下がりました。しかし、潜行性の種や野外識別困難な種のモニタリング、性比や年齢構成、野外での寿命、換羽など、主に標識調査からしか得られない情報が、まだまだたくさんあります。種の識別はもちろん、性や年齢の正確な識別が重要なことは言うまでもありません。また、調査データの扱いも変化しています。近年では、調査結果の公表が進み、さらに調査データが活用（論文化）される場合も増えてきています。つまり、学術論文の元となりうる正確性が求められるわけです。したがって、バンダー全員が一定の基準以上の識別能力を維持するために、今まで以上に識別ガイドの必要性が高まっていると思われます。

使いやすい識別ガイドを目指して

ガイドの必要性は今に限ったことではありません。欧米では古くから多くのガイドが発行されてきましたし、山階鳥類研究所のカラマニエールや、標識協会の識別論文などもあります。しかし、若手バンダーには古い資料の収集は非常に困難でしょうし、ベテランバンダーにとっても、新たな知見によって更新される情報を追うことは一苦労です。そこで、全国のバンダーが自分の（網場の）得意な種についての知見を共有し、自分たちで識別ガイドをつくることを考えました。幸い、標識協会のご支援で ML id-guide を立ち上げ、情報交換を始めましたが、ML では議論が活発になると複数の話題を同時並行で読むことが難しく混乱を招きます。また、ガイド作成の作業分担がうまくできず、困っていました。そこに提示してもらった解決策が Slack と Wiki でした。とても便利ですが、新しいツールは慣れるまでがたいへんです。id-guide 参加者の中でも、まだ活用していない方が多いのではないかと推測しています。今回の発表が、みなさんの意識改革と、便利なツールに手を出していただく契機になることを期待したいと思います。

識別ガイドの IT 化について

細谷 淳

標識調査の有用性の一つに、捕獲し手にとって見ることができることで、識別の難しい種類を確実に識別できることや、難しい性や齢を識別できることがある。これらの情報の蓄積は生物多様性の理解や、種の保全に役立てることが期待できる。しかしながら標識調査員の間で種や性、齢の識別の方法が十分に共有出来ていないといえない。

紙媒体による情報共有は書籍やカラーマニュアルという形でこれまで進められてきたが、現在では入手が困難なものや、内容が古いものもある。また新たに紙媒体を作ることは時間や費用がかかり、更新も難しい。また紙媒体は持ち運びが困難であるという問題を抱える。

これらの問題を解決するため、発表者は Wiki システム(dokuwiki)を利用することを標識識別マニュアルプロジェクトに対し提案し、2021 年 3 月より Japan Bird Banding Identification Wiki として運用を開始した。またこれに先立って本プロジェクトを円滑に進めるため 2020 年 12 月にチャットツール(Slack ワークスペース名 Japan Bird banding identification guide editorial team)の導入をした。

Wiki システムには紙媒体のマニュアルに対して①共有が容易（オンラインで常時に閲覧可能）、②多人数での編集が容易(だれでも好きな時に好きなように編集できる)、③随時更新ができる、④スマホで閲覧できるため持ち運びが簡単などの利点がある。

IT 化に関して重要な点は、閲覧するデバイスが多様なので、細かいレイアウトなど見た目を気にせず、情報の共有（文字と図など）と正確さにのみ集中することがもっとも重要なことであるが、この点は多くの参加者と共有出来た。

Wiki は 2022 年 12 月の段階で、6 目 13 科 43 種のページが作られ、多くのページで十分な情報が掲載されており、種類によっては既に有用なガイドとして利用可能な状態にある。チャットツールは、コミュニケーションツールとして電子メールの持つ現在の問題点（ジャンクメールが多くて見逃す、挨拶など冗長な文字列が必要、自分がアクションを取る必要があるかが分かりづらいなど）を解決するツールとして現在多くの企業・団体に採用されている。話し言葉で気軽にコミュニケーションが出来る点や、チャンネル、スレッド、メンション機能により、自分が見る必要がある会話のみ追えることで、多大な時間的コストを節約することが出来る。コミュニケーションも端的かつ活発になり多くのプロジェクトで生産性が上がる事が知られている。

本プロジェクトでも Slack により活発にコミュニケーションがなされ、多くの Wiki ページという成果物を得ている。

現状 Wiki 編集を行う参加者が少ないという問題点が指摘されることがあるが、書きたくなった人が書きたいタイミングで書けば良いのではないかと発表者は考えている。しかしながら書いた人にもう少しインセンティブがあっても良いかもしれない。Slack の仕様変更によりチャットの内容が 90 日間のみしか残らなくなったが、元来 Wiki ページ作成のための口頭によるコミュニケーションのようなものと位置づけているので、保存したいものは Wiki ページに書けば良いのかもしれない。

日本産ムシクイ類検索表作成への道のり

川路則友（札幌市）

ムシクイ類の識別は多くのバンダーのみならず野鳥観察者にとって、かなり手強いながらも、永遠に追求し続けたい魅力あるテーマの一つであろう。その原因は、互いに音声（とくにさえずり）では顕著な違いを持つにもかかわらず、形態的にはかなり類似する種が非常に多いところにある。狭義のムシクイ類（*Phylloscopus* 属）だけでも、世界で 80 種ほど記載されている（IOC リスト）。日本で記録されたムシクイ類に絞って過去の日本鳥類目録をたどってみると、当然ながら徐々に種数が増えてきており、最新の目録改訂 7 版（2012）で 15 種となっている。ただ、つい最近でも、四国で Chinese Leaf Warbler が観察されたことなどを考えると、次期鳥類目録（来年発行？）ではさらに増えると予想される。またこれまで日本で標識された種は 14 種であるが、今後の記録の増え方を考えると、いつどこで何が捕まっても不思議ではない。それがまたとてつもない魅力の一つであり、日々のバンディングでわくわくドキドキの連続でもある。

バンディングは野外観察と違い、個体を手に取り、しっかり見ることができるが、鳥を弱らせることがあっては本末転倒なので、なるべく速やかに同定し、放鳥しなくてはならない。ムシクイ類識別用には、古典の名著「A systematic review of the genus PHYLLOSCOPUS」（Ticehurst 1938）を始め、これまで数多くの文献が発行されているが、その多くが各種の詳しい記載に終始しており、短時間でそれらをすべて照合し、目前にいる種の同定に適用するのは容易なことではない。そこで、まずどこに注目するべきか、次にどこに・・・といった指標を、事前にじゅうぶん考えておく必要がある。その際に便利になるのが検索表である。これは段階ごとに注目すべき形質で次々選択を行い、少しずつ候補種の絞り込みを行うことで、最終的に目的の種にたどり着く手法である。

演者は、この検索表を日本鳥類標識協会員どうしの知見の蓄積で作成可能ではないかという期待をもって、2021 年 1 月に Slack の中でムシクイ科チャンネルを開いた。その結果、当該チャンネルには 50 名もの参加があり、やはりバンダーの間でのムシクイ類への関心は高いものとあらためて感じさせられた。Slack では、多くの参加者と有効なやりとりを続けていく中で、具体的な検索表が徐々に形成され、幸いにも「日本産ムシクイ類検索表」としてなんとか Wiki に書き込むまでに至った。これが果たして完成形と言えるものかまだ自信はないが、実際にムシクイの仲間を手にとった経験をもつ多くの会員の知見の集積により、今回の検索表ができあがったものとする。また、検索表作成が刺激になったこともあり、ムシクイ各種についての Wiki ガイドも少しずつ充実させていく動きがある。今回、日本産ムシクイ類検索表作成に至る経緯について発表し、今後検索表ならびに各種ガイドを充実させ、日本のバンダーにとってムシクイ類の識別が容易となることを期待したい。

サンコウチョウチャンネル 90 日トライアルから垣間見た識別ガイドの課題

熊代直生（大阪府）

ムシクイ科チャンネルを筆頭にひとしきりの盛り上がりを見せた識別ガイドでしたが、白熱したそれは一方で、「展開について行けない」といった疎外感の温床ともなり、距離を置いてしまった方も少なからずいるようです。そうして少しずつ書き込みの頻度が下がりつつある Slack に、追い討ちをかけるような仕様の変更が訪れました。それは、書き込んで 90 日を過ぎた記事は、順次削除されていく、というもの。手元のデータや資料から身をよじってひねり出した推論も、先輩諸氏の豊富な経験と勉強量から紡ぎ出された見識も、たったの 3 ヶ月で、もう振り返ることができなくなるのです。この点は深井さんのご尽力で、定期的にアーカイブ化するという対策がとられ、そうした貴重な資料も、じつは消してほしかった恥ずかしい失敗談も、いつでも読み返すことができるようになっています（ナンテコッタ）。

それはさておき。御仕着せるように降りてきた 90 日の時限制ですが、そこには新しい可能性も秘めているのではないかと私は感じました。いつまでも返事を待ち続けてずるずると間延びしてしまう傾向を断ち切って、90 日が来たら、そこまでに提案したり得られた意見だけを軸にして、wiki に移行する流れを形成できないかと考えたものです。90 日の期間に大した声が集まらなかったとしても、それは参加メンバーに、それ以上に言及できるだけの知見がないもの、とみなします。異議なきときは沈黙をもって答え……て、悪者のセリフみたいですが、意見が出ないこと自体を、推進力として活用するわけです。次の段階(wiki 上のマニュアル形成)に進んでからでも議論は随時できますし、かえってたたき台として使える wiki があつたほうが、出やすい意見だってありそうです。

折しも、Slack 上ではサンコウチョウ雌の尾羽の、謎の 1 枚黒変が話題となっていたところ。秋のバンディング限定の私には手が届かない、憧れの Longtail 成鳥達の画像が行き交っています。幼鳥なら手元にそこそこ溜まっているので、これとセットにできれば、マニュアルめいたところまで届くかもしれない、と、この 90 日間で仕上げるスタイルへの挑戦を表明したのでした。

12 月に迎えたおおむね 3 か月、幸いにして、いろいろと資料もそろえて、サンコウチョウの wiki ページの立ち上げには到達しました。まだまだ足りない要素、偏った見解もあるかと思います。引き続き忌憚ないご意見・ご指導をいただきつつ、完成へ近づけていきましょう。こんな調子で、次々と Slack の新しいチャンネル→wiki という手順を作って行きませんか？

さて、ここに至る過程で何点か、バンダーが寄せ集めで作るマニュアルの意義について、思案しました。にわかにならうまく説明できるか不安ではありますが、これを皆さんと共有して、今後の方針に関する意見交換につなげたいと思った次第です。

◇このマニュアルを作る主体は、必ずしも研究者ではない、一般のバンダーである。

特定の種に注力しない日常的、継続的な調査の中でこそ、見えることもあるはず。

◇100%の識別は無理として、どの程度の誤判別まで許容されるべきか。

瞬間での判断が有効な場合もある。個々のバンダーでなく、マニュアルがその責を担保する。

◇マニュアルの対象となるのは、日本を中心とした極東の鳥たち。

欧米の資料は参考になるけど微妙。正解に日々触れているのは、我々日本在住のバンダー。

逆転の発想が必要だったのか

-シマセンニュウの年齢階級判別-

○高木昌興・白岩颯・古巻翔平（北大院・理・多様性生物）

生年の翌年の春から夏まで羽衣に幼羽を残す種では、その期間に若鳥（第一回夏羽）と成鳥（第二回以降の夏羽）を区分できる。しかし幼羽から完全換羽で第一回冬羽、繁殖期前に部分換羽により夏羽を獲得する種などでは、若鳥と成鳥を区分できないことが多い。*Helopsaltes* (*Locustella*)は、生年の翌年の繁殖期前までに幼羽をすべて失うと考えられ、年齢階級の判別が難しい。しかし、虹彩色が濃く赤褐色を帯びた成鳥、灰褐色の若鳥と対比させることが可能かもしれない。また舌斑は巢内雛に明瞭だが、その痕跡に濃淡があり、より薄い個体が成鳥かもしれない。さらに若鳥は換羽後も成鳥より翼や尾が短い可能性が経験的に示唆される。本研究では、2021-22年の繁殖期に北海道石狩市、および根室市で捕獲したシマセンニュウ *H. ochotensis* の虹彩色、舌斑、換羽様式、翼長を用いた繁殖初期における成鳥と若鳥の判別の可能性について議論したい。適宜センニュウ属マキノセンニュウ *L. lanceolata*、エゾセンニュウ *H. amnicola* を参照する。

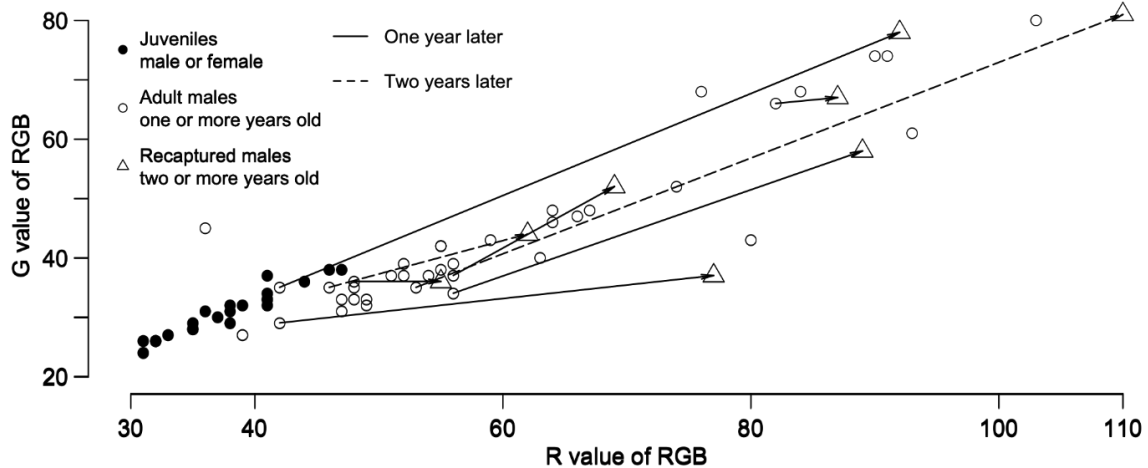


図 1. シマセンニュウの虹彩色の個体差と経年変化. 虹彩色は経年的に赤みを帯びる.

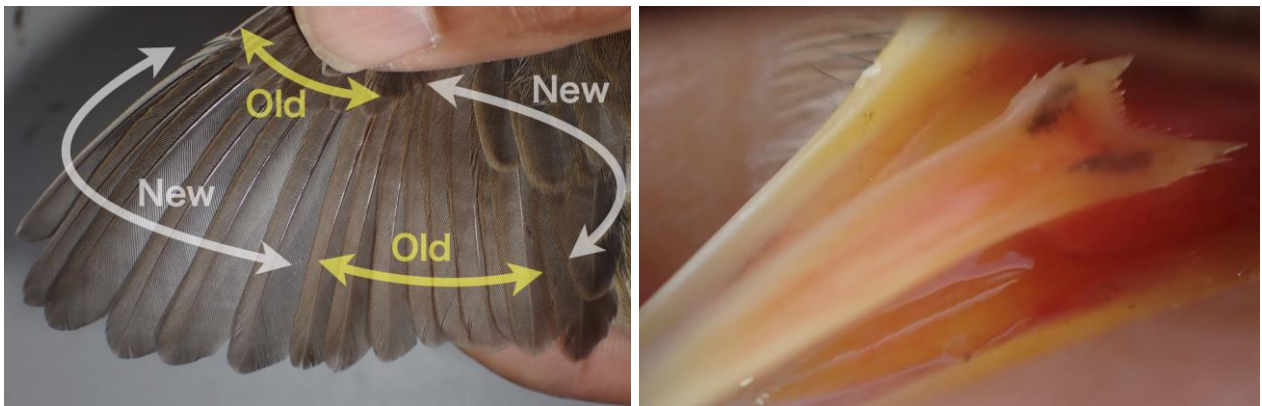


図 2. 左:秋 渡り前のシマセンニュウ 2AR-13698 (Aug 10 2022) 世代重複する翼の羽が明確に判別できる. 右:初夏 渡来直後に捕獲したシマセンニュウ第一回夏羽(推定) 2AH-74990 (June 7 2022) 比較的明瞭に舌斑を残している.

カワセミの換羽

内田 博（埼玉県）

2020 年 11 月下旬から 2022 年 11 月までの 2 年間、捕獲、再捕獲を繰り返し、捕獲個体の換羽状態を記録し、さらに捕獲した、すべての個体の全身、翼、尾などの写真撮影を行い、換羽がどのように行われているのかを検討した。調査は埼玉県の中央部の東松山市周辺、約東西 10km、南北 10km 内の 3 河川および溜池で行った。カスミ網を設置した場所は 100 ヶ所以上で、1 日に 3～6 ヶ所、月に 10 回前後、同じ場所での捕獲は月 1 回程度にしたが、少数の場所では月 2 回程度の調査も行った。換羽状態についての基本的な経過は山階（1980 復刻版）に書かれていて、また小田谷（2017）によって、少数の早生まれの個体は初列風切を換羽する個体があることが報告されている。調査を始めたのは 11 月だったので、山階によると、成鳥、幼鳥の区別が難しくなる時期である。そんなわけで、最初の数ヶ月は、まったく手探りの状態で、年齢は分からず、性さえも区別が明確にできないような状況であった。捕獲を続けていると、カワセミの幼鳥は 5 月下旬から捕れ、8 月がピークになり、12 月にもまだ胸に青黒い羽の幼羽が残っている個体もいた。分析は 5 月から捕れる、胸に青黒い羽のある個体を幼鳥として、その青黒い羽が換羽によって無くなった個体を 1W として分類した。また翌年 5 月からは 2 年目の鳥、2 歳鳥とした。このように 5 月を境に 1 年を区切った。換羽状態の判断は、モルトカードの記録と、写真撮影をしたものを見比べ、体羽、翼（初次列）、尾の 3 部分について分けて検討した。捕獲した個体は 434（N252、R182）個体で、幼羽鳥だった個体は初次列の風切羽は、翌年の春までほとんどが換羽していなかった。少数の個体は初列風切羽の換羽があったが、P7（幼羽鳥の 9 月から翌年 7 月までの 127 例中 16 例（P6、P7 の 2 枚の換羽も 1 例あった）で換羽が始まっていた。2 年目の夏の換羽で多くの例で成鳥羽に変わったが、一部の個体では幼羽も残ったままの個体もあった。体羽は 7 月から換羽が見られ、11 月下旬になると終了した。この終了時には体羽がすべて成鳥羽になるより、幼羽も混じったまま、休止していた。体羽は 3 月から 5 月に春の部分換羽も見られた。また、2 年目の 7 月からは全身換羽も始まり、この換羽で完全な成鳥羽に変わるようであった。尾は当歳鳥では、8 月から中央の 1 から換羽が始まり、外側へ向い数枚の尾が換羽したまま休止する場合が多く、尾全体が 11 月に成鳥羽に替わっている個体は少なかった（ただし、尾の外側の羽 5-6 付近の判定は自信が無い）。尾は 2 歳鳥の 11 月頃になりほとんどが（？）成鳥羽になった。カワセミでは、このように換羽の経過が長期にわたって、いろいろな段階にある個体があり、この長期に亘る換羽状態の違いは、カワセミの繁殖期の長さに関連していると考えられた。ただ、判断は難しくエラーの含まれることが多く残っていると考えられ、さらに精度を高める必要を感じている。

利根川下流域でフラッグを装着したシギ・チドリ類の移動記録

○小田谷嘉弥^{1,2}・望月通人²・小西広視²・阿子島大輔²

(1:我孫子市鳥の博物館 2:香取海鳥類標識調査グループ)

鳥類の生態研究において、カラーマーキングは再捕獲せずに個体識別が可能な手法として有用である。中でも、番号や記号が刻印されたカラーフラッグは、ある程度遠距離からも個体識別が可能な標識手法として、日本が属する東アジア・オーストラリア地域フライウェイをはじめ、世界各地でシギ・チドリ類を対象に広く用いられている。本研究では、利根川下流域の湿地においてフラッグの装着を行い、これらの地域に生息する種の渡り経路の解明に資する情報を収集することを目的とした。

フラッグの装着は2018年4月に開始され、現在まで継続している。調査時期は主に春と秋の渡り時期だが、越冬期および繁殖期にも一部調査を行っている。捕獲調査は湿地にかすみ網を張って行う方法と、フラッシュライトとたも網を用いた手捕りによって行った。捕獲された個体には右足跗蹠に金属リング、左足跗蹠に刻印無しのカラーフラッグ（青）、左足脛に刻印のあるカラーフラッグ（青）を装着して放鳥した。ヤマシギのような夜行性の種、タマシギやコチドリなどの繁殖種のヒナ、左足に怪我をしている鳥にはフラッグを装着していない。

2018年4月から2022年11月までの間に、25種678羽のシギ・チドリ類にフラッグを装着して放鳥した。10羽以上を放鳥した種は、放鳥数の多い順にオオジシギ（258羽）、チュウジシギ（209羽）、タシギ（79羽）、ムナグロ（56羽）、ハマシギ（14羽）、タマシギ（11羽）、タゲリ（10羽）の7種だった。

フラッグを装着して放鳥したうち、9種25羽が5 km以上離れた地点で回収された。オオジシギでは中継地間の移動4例に加え、繁殖地への移動が2例確認された。ムナグロ、ハマシギ、タゲリでは、中継地間または中継地から越冬地への移動がそれぞれ4例、7例、3例確認された。また、タマシギ、タシギ、キアシシギ、ヒバリシギ、チュウシャクシギで各1例ずつの回収記録が得られた。発表では、各種の回収記録から示唆された渡りの経路や、中継地における環境利用について議論する。

本研究は、公益財団法人山階鳥類研究所が請け負った環境省のシギ・チドリ類追跡事業の一部として実施された。フラッグの頒布や回収記録の整理等に便宜を図っていただいた山階鳥類研究所の仲村 昇氏と千田万里子氏にお礼を申し上げます。また、捕獲調査を手伝っていただいた香取海鳥類標識調査グループのみなさま、フラッグ付き個体の画像や情報を提供いただいた多くの方々に感謝を申し上げます。

大阪自然史フェスティバル 2022 におけるブース展示

須川恒（京都市山科区）

鳥類標識調査の活動において、普及啓発の目的で 2009 年から大阪自然史フェスティバル(年によってバードフェスティバル)の場でブース展示活動を行ってきた。団体名は多少変わっているが、2022 年 11 月 19 日 20 日鳥類標識調査グループ・関西と名乗ってブース展示を行ったのでその報告をする。

経過とねらい

自然史フェスティバル(年によってバードフェス)は秋に2日間大阪市立自然史博物館で開催される。関西の自然系フェスとして全国的にも注目されている。2022 年 11 月 19 日(土)20 日(日)9:30~16:30 に開催され、2日間で2万人弱が来訪した。

鳥類標識調査がらみではカラーマーキング調査グループ・関西(2009~2016 年 4 回)、冠島調査研究会(2017 年オオミズナギドリ標識調査)(1 回)、鳥類標識調査グループ・関西(2018~19 年2 回)とブース展示をしてきたが、ここ2年はコロナで開催されていなかった。

ねらいは関西圏の自然好きの人にバンディングの普及・啓発をし、バンダー間の交流をはかることであった。

展示した内容の紹介

ポスター展示物としては、鳥類標識調査の概要、インハンドによる識別ガイド、裏庭バンディング、カラーマーキング調査、ユリカモメからはじまったシジュウカラガン物語の紹介、冠島のオオミズナギドリ調査などを展示し、一部は PC プロジェクターの投射面としていくつかのプレゼンをした。

人寄せグッズとしてはカラーリング、片無双網模型、オオミズナギドリのぬいぐるみなどを置き、無料配布資料も何種類か準備して配布した。

実際の運用と反応

一部の時間帯を決めてプレゼンをしてもらった。また、さまざまな関心でやってくる人は多様で、それぞれの対応が楽しかった。

自分なりの評価と課題

フェスにくる多くの人は今後自分が接したい世界を探している。関心の分野や世代などにより、バンディングへの関心も多様(例:バーダーインハンド識別資料にひかれる、カラーマークされた観察者には協会マーキングの部屋を紹介、鳥好きの中学生は将来冠島調査に参加したいと言う)。展示資料や説明はそれなりに役立った。

過去の展示はそれなりに力となっていて継続することの大切さが実感できた。

来年の展示にどう今年の結果を活かすか いろんなアイデアがうまれた。

関東とか他の地域でもこのようなブース展示の活動がはじまれば資料(ポスター展示、展示資料グッズ、配布資料)の共有とか情報交換が可能である。考えたい人は連絡されたい。

なお、今回のブース展示にいたる経過とねらいは以下にもまとめているので読みたい。

須川恒「鳥類標識調査の可能性を探る -一翼にたくす地球の未来-」

ALULA65(2022 年秋号)::39-50. 以下のグループのサイトの冒頭に紹介。

<http://larus.c.ooco.jp/BirdbandingKansai.htm>

ヤンバルクイナの捕獲方法（その2）

○尾崎清明・米田重玄（山階鳥研）・渡久地豊（工房リュウキュウロビン）

これまでに野生のヤンバルクイナを 132 羽捕獲放鳥してきた。捕獲方法別にみると、ボウネット（自動無双網）67 例、かご罠 63 例、手捕り 2 例となった。前 2 者はいずれも形状は工夫をかさねて、異なっている。それぞれの方法については、2015 年の標識協会大会ですでに報告したが、捕獲の効率などその後の知見を含めて詳述する。

まず、重要なのは、音声による誘引で、複数個体の様々な声を状況によって適宜変更する方法（無線スピーカーの導入）によって効果が高まった。ビデオカメラの記録によると、周辺に個体がいる場合には、誘引開始から早ければ 5 分、遅くても 30 分位までには、音声のまわりに姿を現す。この最初の接近で捕獲することが重要である。それを逃し、「声の主」がいらないことに気づかれると、捕獲具周辺から遠ざかり、その結果捕獲に至らないことが判明した。

誘引効果を持続させるのは、クイナのデコイや天敵ハブのデコイが有効で、特に後者では 30 分以上も警戒声を発しながら周囲を回り、その際に家族など複数個体が近寄ってくることも観察された。しかし、一方で、明らかにこれらのデコイの存在に気づきながら、遠ざかる個体も存在するので、デコイが万能でないことも分かった。餌や擬似餌による誘引は、直近に来た時には一定の効果が認められたが、餌が小さく動きがないためか気づかれることは少ない。

また、上記の条件に加えて捕獲の成否をわけるのは、捕獲場所の地形や植生の有無などの環境条件が大きい。つまり、ヤンバルクイナの行動、歩くコースなどを予測し、確率の高い位置に罠を仕掛けることである。これらヤンバルクイナの捕獲方法は、他の種類の捕獲にも役立つ知見があるものと期待する。

空中写真と地形図を用いた網場候補地選定事例の紹介

仲村昇

土地勘の無い地域で標識調査を行う場合、網場の選定は大きな問題となる。近隣で調査経験を持つバンダーや、熱心な地元バードウォッチャーといった情報源が見つからない場合、ゼロから候補地を探すことになる。

このような時に空中写真と地形図を用いると、網場候補地を絞り込むことができ、現地での探索効率をあげられる場合がある（当然ながら、最終的には候補地を実際に訪れて諸条件を確認し、土地使用許可を得る過程は必要）。

演者が経験した事例をいくつか紹介する。

1. 2011 年秋にオオジュリンの尾羽異常が多数確認されたことを受けて、原発周辺でもオオジュリンを捕獲してみる事となった。→空中写真で福島県内のまとまったヨシ原を抽出。当時立ち入り可能だった地域内で最も原発に近い南相馬市の河川敷で 2012 年 1 月に調査実施。

2. 2012 年春、福島県内で MAPS 調査を開始することになった。→当時立ち入り可能だった地域の中で空間線量が高い山林を選び、車でアクセスできて樹高が低い場所を探した。飯舘村の高圧送電線敷地で 2012 年 5 月から調査実施。

3. 2014 年春、神奈川県南東部に転居した。冬に時間がとりやすいため近隣で越冬鳥調査をすることにした。→空中写真からまとまった緑地を選び、耕作放棄地や農地と緑地の境界を探した。2022 年 1 月に 1 カ所で調査開始。他にもう 1 カ所についても下見の感触が良かったので許可申請予定。

短い紐の鳥袋の利用報告

細谷 淳

本報告では、現在日本で使われている鳥袋の紐を短くすることで、紐同士が絡まらない、色別カラビナで中の鳥が覚えやすい、作業場でぶら下げやすい、洗濯機で洗しやすいなど、多くの利点が認められたため、これを報告する。

鳥類標識マニュアルでは、鳥袋は捕獲した鳥を一次保存するのに重要なものとして合計1頁以上を使って詳細に説明されており、見本として縦40cm、横30cmの鳥袋に110～130cmの紐を用いるものが紹介されている。これに従って作成すると、紐は袋の口を絞り結んだ後でも調査者の首にかけられる程長くなる。首にかけることが出来るという利便性がある一方で、紐同士が絡み合い不便・不快である。

発表者は2015年10月イギリス、2016年4月にカナダで標識調査に参加する機会を得た。その際両地では日本の標識マニュアルに掲載されているものよりも紐の短い鳥袋を用いていた。帰国後の2017年9月から発表者も紐の短い鳥袋を作成し自身の調査で使用しており、その使用感は良好である。

短い紐の鳥袋は、標識マニュアルで説明されている長さのおよそ半分の61cmほどの長さの紐を用いて作成する。紐が短いためそのままでは調査者の首にかけることが出来ない。そのため首にネックレス状の紐をかけ、そこにカラビナを通し、そのカラビナに鳥袋の紐をかけることで持ち運ぶ。カラビナはロック機構のあるものを使用し、移動中の脱落を防ぐ。

短い紐の利点として、①首にかけの際にカラビナを利用するため、複数の鳥袋の紐同士が絡まることなく余計な時間のロスやストレスが無いこと、②カラビナの色などを工夫することでどの袋に何が入っているか覚えやすいこと、③作業場でフック等にかける際、ぶら下がった鳥袋がじゃまにならず下のものに接触しないこと、④洗濯機を利用した際の絡まりが無いことなどが挙げられる。特に鳥インフルエンザなどの感染症が問題視される昨今、鳥袋の定期的な洗濯は欠かせない。鳥から人への感染を未然に防ぐことはもちろん、鳥から鳥への感染は遥かに確率が高く、バンディングによる鳥への意図せぬ悪影響を防ぐ必要がある。また病原体のみならず寄生虫の懸念もある。本来垂直伝播しかしないような生活史をもつ病原体・寄生虫が種間で水平伝播する可能性はできる限り減らすべきである。実際、カナダの調査地では鳥袋の洗濯をせずに再利用することが禁止されていた。

網場紹介等

- ・北海道 浜頓別ステーション 仲村昇

秋に、湿地林の中を通る高台となっている廃線跡に直線状に約 30 枚張っています。捕獲数の 8－9 割はアオジで、次点はウグイスです。夜用の網場整備も進めています。

- ・北海道 風蓮湖ステーション 仲村昇

秋に風蓮湖に注ぐ河口付近の草地及び林内に約 26 枚張っています。捕獲数の 8－9 割はアオジで、次点はベニマシコです。繁殖期にはセンニュウ類などが捕獲されます。

- ・福島県 南相馬市新田川・飯館村長泥 仲村昇

2012 年に繁殖鳥調査（MAPS）用に開拓しました。前者は広いヨシ原、後者は山林の送電線敷地です。初めてヨシ原に網を張る際には GPS を使い、網列を 50m 間隔にしました。

- ・北海道 函館山・松前白神 佐藤理夫

函館山はルリビタキの放鳥数が多いです。松前白神は 8 月にエゾムシクイ・センダイムシクイ・コルリが多数捕獲される他、春と秋にも多種類が放鳥されています。

- ・メロディーシャワーの後継機は？ 田川之彦

ずいぶん前に生産終了となってしまったメロディーシャワー。後継機の候補として試した 10 種あまりの中から、いくつか紹介します。

大会実行委員：仲村昇（委員長），油田照秋

シンポジウム企画支援：須川恒，深井宣男

2022 年度（第 36 回）日本鳥類標識協会全国大会 講演要旨集

編集・発行：2022 年度（第 36 回）日本鳥類標識協会全国大会実行委員会

千葉県我孫子市高野山 115 保全研究室気付

発行日：2022 年 12 月 10 日
